

白の葵や
照りながら
桂一

御遠忌テーマ

親鸞さま、なぜ、お念仏なの？

— 出会おう、語ろう、今ここで！ —



お寺に参らんとムシになる

今日は、自分の歩みをお話し
ながら、念仏をどう頂くのか、
今なぜ念仏なのか、皆さんと一
緒に考えて共有していきたいと
思います。

私の仏法との出遇いは、祖母
がよくお寺に連れて行ってくれ
たことに始まります。昔はお寺
しか行く所がなかった、そうい
うよき時代です。報恩講の時は
白いご飯が食べられる、それが
嬉しくてね。祖母が「人はお寺
に参らんとムシになるんや」と
よく言っていました。ムシはム
シでも、師の無い無師ですね。
私たちはお寺で善き人の教えを
しっかりと聞かないと、善き師に
も仏法にも出遇えないというの
です。祖母は難しい字は読めま
せんでしたが、お経もお文も全
部読んでました。だから字が読
めれば解るとは言えませんが。経
本は体で覚えていくものですね。
筑紫女学園大学の附属幼稚園
の園長をしていた時に、筑女の先
生の特徴は三つあると言ってい
ました。「頭がいい、育ちが良
い、美人である」ということ
です。「頭が良い」というのは、
仏様の智慧を頂くこととです。

毎日子どもたちと一緒に念仏を
称えながら本物の智慧・慈悲の
目で子どもたちを見てくれてい
ます。「育ちが良い」というの
は、子どもたちと一緒に阿弥陀
様に育てられているのだから、
それ以上の育ちの良さはありま
せん。「美人」というのは、人
として美しいということ、最
も美しい姿が仏様の姿ですから、
先生がたは仏様に近い姿をして
いる。つまり子どもがみんな先

生活の中で出遇う親鸞さまの教え

牧野桂一先生

(大分子ども発達支援研究所々長)

2019年7月13日

生の真似したくなるような姿を
しているということ、それが
人として美しいことです。
そういう意味では、私も婆ちゃん
で、寒い時は婆ちゃんの
懐にポンと入れられて温い
すよね、私も育ちはよかったです
なあと思っています。婆ちゃん
から厳しく言われたのは、小川
の魚をバケツ一杯獲って来て、
食わずに死なせた時には「食わ

んもん殺しだけは、しちやいか
ん」と厳しく叱られました。我々
は生きていくために生きものを
頂きます、それは許されるけど
も、食べもしないで殺しちやな
らんと。これが本当の意味でお
婆ちゃんの命に対する教えだっ
たのです。

師と僧伽に出遇う

私は小学校の教師で、「教え
るとは」ということを考える
ようになりました。算数や国語

の内容をただ教えるような事では
済まないのではないかと悩み、
それを求めているんな先生方に
お会いしました。なかでも齊藤
喜博先生の講演会や勉強会にずつ
と参加して追っかけていました。
ある時「先生みたいになるには
どうしたらいいですか」と聞い
たところ、微笑みながら「私で
はない。『古人を求めず、古人
の求めたところを求めよ』とい

うことが大切です」と言われま
した。そして先生は『歎異抄』
をそらで暗記し、『教行信証』
を枕元に置いて暮らしていると
言いました。それを聞いてから
私も『歎異抄』や『教行信証』
に関係する会があれば、そこに
行って学ぶ生活が始まりました。
そこで出遇ったのが、柿本謙
誠先生です。身近に真宗の教え
を説いてくれる人に出遇えて、
聞法の日々を過ごしました。し
かし教えの言葉は解りますが、
自分の身に受けとめるというこ
とが難しいということも同時に
わかりました。だから僧伽で御
同朋御同行と一緒に歩む時、は
じめて自分もそういう人間に少
し近づいていく事が出来る。お
寺はそういう意味で非常に重要
な道場・僧伽です。そこに集まっ
た人が手を繋いで、弥陀の本願
を信じて浄土に生まれ仏になっ
ていくという信頼の中で、喜び
を感じ生きていくということ
です。同時に、自分がいかに救わ
れ難い人間であるかが理解でき
れば、弥陀の誓願の有り難さが
身に浸みってくるはず。『弥
陀の五劫思惟の願をよくよく案
ずれば、ひとえに親鸞一人がた

めなりけり」と、私のために弥陀の誓願があるんだと、しっかりと受け止めることが現実生活の中では出来にくいのです。先ほど紹介しました柿本先生が、法話会で仏法を頂いて生きている仲間の話を聞かせていただきながら、いつも「本願むなしからず、本願むなしからず」と言われていたことが今も耳に残っています。

あるがままを受け止めると 豊かな世界が開けてくる

教員として出会った子ども達の生き様の中に念仏の響きを聴かせて頂いてきました。生活の中にあるお念仏をしつかりと受け止める身にさせて頂く、これが念仏の御利益だと思っっています。自閉症という自己コントロールの難しい子どもと一緒に学習するようになって、初めはお母さんが連れて来てくれましたが、徐々に一人で通えるようになり、いつも帰りにお店に寄って自分の好きなものを盗って帰るので。今まではお母さんが支払っていたんです。何回注意しても効き目がない。そこでお父さんが身振り手振りで、腕を胸の前

で組みながら「ガ・マン、ガ・マン」と教えました。これが効き目が有って我慢が出来るようになりました。そのお父さんに癌が見つかりました。子どもは遊んでる姿を見るとやるせなくなつて「お前がいるから死ねない、死ねない」と苦しむ父の姿を見たその子が、お父さんの前に行つて「ガ・マン、ガ・マン、ナンマンダブ」と言つたそうです。この時の子どものお念仏ほど胸に響いたものはないとお父さんが話していました。

特別支援学校にはいろんなタイプの子どもがいます。お母さんと一緒にバスから降りてゆつくり歩いて、花が咲いてたら花に挨拶をしてじいっと見えています。そうするとなんだか花が笑うように見えるのです。向日葵ひまわりはお日様に向くといいいますが、その花もその子を見ているような気がします。そして朝露が葉っぱ

の先の方に溜まって太陽に輝いているのを見ているんです。ダイヤモンドもかなわない位に美しいのです。それを周りの人は「あの子は可哀想になあ、生きとって何の楽しみがあるんだろ

う」って言っていたのです。お母さんは「早く、早く」と言わないで、その子をじつと待つてます。このゆつくりの時間が本当に生きていく豊かさなのだと教えてくれます。念仏という字は「今に心をおいて仏とともに生きる」と書きます。この子どもの姿を見守るお母さんは、この子をお母さんが見守るお母さんは、一緒に生きています。星野富広さんが「野の花に付け加えるものは何もない、野の花から取り除くものは何もない」と画集に詩を添えています。阿弥陀様から頂きたいのちをお母さんが受け止めると、そこに豊かな世界が開けてくるのです。

縄跳びの出来ない子に、よく聞法をしている先生が、縄の真中を切つて綺麗にテープで飾つて、縄跳びができるように導いていきました。竹馬の時も、竹馬を下駄のようにぺったんこにする

ことから始めて、次第に乗れるようにしていました。真宗保育ではその子に寄り添つて、その子がやりたい世界を作つてあげるように、一人一人の子を支えているのです。

誰もがかけがえのない尊い命を生きている

胎児の出生前診断のことです。障害があると分かった子の100人中94人が中絶されています。明治26年の調査で聞きをしなかつた県は4県で富山県、石川県、広島県、山口県。真宗が盛んな所です。肉親が肉親を殺すことは平安時代からありました。子どもの場合は子消し、大人の場合は姥捨てです。

この豊かな国で年に18万人(ある調査では34万人)が中絶されています。交通事故や自殺の比でない命が消されています。一円の募金で中絶を救うエンブリオ活動など、命の大切さを真剣に考える時が来ています。

鈴木大拙先生は、行を「Living(生活)」と英訳しておられます。真宗の行は生活なんです。朝起きて眠るまで、箸の上げ下ろしまで含めた全体に真宗の教えがあるのです。そして赤ちゃんにも年寄りにも流れていて、童謡や童話にも仏様の願いが込められています。私はわたしであるがままに「天上天下唯我独尊」。誰一人として代

わりようのない命を生きている。その命を本当に温かい眼差しで見守るお母さん、お父さんの眼まなこ、家族の眼、仏さんの眼が大切です。誰も見捨てない撰取不捨の眼で一人一人のいのちが見つめられて、今ほど求められている時はありません。

聞き書き担当者・感想

生活の中にいかに沢山の仏法がちりばめられているかを難しい經典が分からなくとも領けるお話でした。自力、他力をどう捉えるかが私の当面の課題でしたが、本願の中で生かしてもらっていると言うことが分かる様な気がします。また先人から頂いた智慧を生かし、自分の中に慈悲の心を育てていくことが幸せに繋がっていくのだというように受け止めさせて頂きました。 牧本和孝

第19回(9月14日)

「南無阿彌陀仏のみぞまこと」

加来 雄之 先生

(大谷大学教授)